



日乗連ニュース

ALPA Japan NEWS

www.alpajapan.org

Date 2006.10.24

No. 30-06

発行：日本乗員組合連絡会議・ALPA Japan
幹事会
〒144-0043
東京都大田区羽田5-11-4
フェニックスビル
TEL.03-5705-2770
FAX.03-5705-3274
E-mail:office@alpajapan.org

ISASIセミナー参加報告

2006年9月11日から4日間、メキシコのカンクンにおいてISASI Seminarが開催されました。ISASIとはInternational Society of Air Safety Investigatorの略で、世界の航空事故調査・安全関係者の情報交換と技術の向上を目的とした非営利団体で、世界各国の事故調査関係者が一堂に会して、Tutorialをはじめ、最新情報を意見交換する場として1年に1回開かれているものです。今回のSeminarには世界35か国、総勢253人の事故調査関係者の参加がありました。日本からは、航空・鉄道事故調査委員会の調査官2名、OB1名、日本航空・全日空、そして航空保険プール、日乗連からそれぞれ1人ずつ、合計7名の出席となりました。

4日間のうち初日はTutorialで、事故調査技術のスキルの向上のために行われているものです。今年の内容は、日本でも航空法改正によって各社に義務づけられたSafety Management System(SMS)の最新状況に関して、ICAO・航空会社・ATCの各方面からの講義がありました。その中で興味深いことは、最新のSMSは現在日本でも注目されているLOSAをはじめとするLine ObserveによるSMSです。ATCの分野でもオランダではNOSS(Normal Operation Safety Survey)というコックピットにおけるLOSAと同様のプログラムが始まっており一定の成果を挙げているということでした。しかしながら、どの講演者も同様に言っていたことは「プログラムへの参加は自発的なものではなくてはならず、組合等の理解・協力が不可欠である」ということでした。現在日本においてもLOSAが開始、もしくは開始されようという状況の中で会社と組合の関係を再度確認していく必要性がありそうです。

その後の3日間はSeminarという形で、各国の事故調査関係者によるプレゼンテーションが20本行われました。紙面の関係上各プレゼンの詳細については割愛しますが、会議場参加者からの注目度が一番高く、質問も一番多かった米国の研究者から行われた「事故調査における複合素材の分析」と、日本でも問題になっている「キャビンクルーのタービュランスによる負傷」を紹介します。

(次頁へ続く)



Failure Analysis of Composite Materials in Aircraft Structures

Dr. Joseph Rakow - Exponent Failure Analysis Associates - USA

航空機における複合素材の採用は今までも部分的に行われてはきましたが、A380 においては 20% 以上、また最新鋭機である B 787 においては 50% もの複合素材が使われています。今までの航空機の材料は金属が主流であり、その疲労や破壊の経過は古くはコメットの事故から数十年の事故調査の蓄積として現在に至っています。しかしながら複合素材においてはその疲労、破壊の過程においてまだまだ未知の分野であり、今までの金属における事故調査の考え方とは全く違う考え方が必要であり、そして複合素材の破壊の基本的な過程が説明されました。そして、複合素材が絡んだ事故例としてニューヨークで Vertical Stabilizer の Overload で墜落した A300-600 の事故調査について報告がありました。

Investigation into Turbulence Related Accidents

Mr. Gary R. Morphew – SCSL, USA

この講義は CA のタービュランスの事故に限定して行われました。日本においてはキャビンサインの運用は”ON”であれば CA、乗客含めて全員が着席しなければならない規程となっていますが、海外の多くのエアラインにおいては、乗客向けの”ON”でもクルーはサービスを続けるという、ダブルスタンダードの運用が主流となっているようです。その理由として、「クルーはプロであるから、多少の揺れは大丈夫であるが、乗客に対しては危険である可能性がある」と言うものです。大きな揺れが予想される場合には、機長から一番上の CA に連絡したうえで、着席させるというプロシージャーですが、その中においても、連絡ミスやキャビンの独自の判断などから、警告があった場合においても事故が発生している事例が報告されました。

各国の Official な事故調査官だけではなく、オペレーターやメーカー、研究者などが一堂に集うこのような会議の役割は今後の航空安全においてより一層重要なものになると考えられます。

次回は、2007 年 8 月にシンガポールで開催される予定です。

この内容に関する詳細は、日乗連事務局内の CD - ROM をご覧ください。

参考 : *ISASI* ホームページ <http://www.isasi.org/>